

菊川西中だより

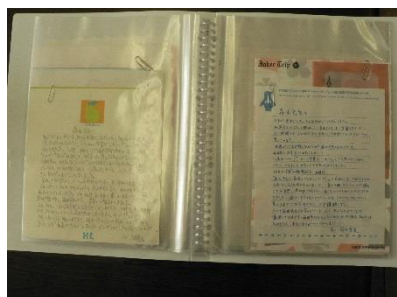
校長室の窓

「本年度もあと少し
で終了です」

～リセットの時せまる～



平成28年度も最終月の3月になりました。一昨年の四月号で「学校は毎年リセットできる」という話を書きました。2年前の話題は「名



残惜しいは次への期待感」と言うことでした。今年もリセットの時
が迫って来ました。

少々見づらいますが、左の写真のクリアファイルには私の今年までの教職生活35年間で子ども達から貰った手紙の一部が「これは部活の出来事」「これはクラスの出来事」……と場合分けして入れてあります。現在クラス担任ではない私ですが、子ども達や若い先生達が悩んでいる時『〇〇くん、この子はこういう状態から頑張ったのだよ。君も今を抜ければきっと道が開けるよ』や『〇〇先生元気出しなよ。私も若い頃、自分のクラスの指導で悩んだけど、クラスの子も達からこんな手紙を貰ったよ。がんばってよかったとその時思ったよ』……など、悩んでいる子ども達や先生達を励ますのに使おうと思ったからです。家に帰ると小さなダンボール箱1杯分の手紙があります。私の宝物であり、死ぬ時は棺桶の中に入れてもらおうと思っっているくらいです。

このファイルの中につい最近25才の時に担任した**Kくん**から貰ったメールがあります。ネットを見ていて、偶然菊西中のHPに当たり、『校長室の窓』のページの私の写真を見て懐かしくなってメールをくれたという事でした。Kくんは中学校時代『不登校』生徒で年間欠席日数が100日近くに上っていましたが、中3の時、修学旅行に参加できたことをきっかけに休まなくなり、高等学校へも進学しました。修学旅行の前日(日曜日でした)私は嫌がるK君を説得するために家庭訪問し、半日ほど話したことが思い出されました。少し長くなりますがK君のメールを引用します。

(引用)……自分は中学卒業後、高校に通い始め、高校二年に母が、三年のときに父が他界しました。高校卒業後何も分からないまま、社会に出てサービス業で働き始めました。働いているときに「障害者・高齢者」の辛さを知る機会があり、そのとき森田先生の「優しさ」が脳裏に鮮明にでて「なんとかしなくちゃ」と何も知らないまま仕事を替え、今は社会福祉法人の施設長をやらせていただいています。子供達は森田先生、高齢者は自分が！と地域に貢献できればと日々悪戦苦闘しながら何人もの高齢者達の看取りをさせていただき、家族の絆も日々勉強させていただいております。……(引用終わり)

修学旅行前日……**ここでKくんはリセットしました!!!!**……学校にこれなかった自分をリセットし、新たな一步を踏み出しました。高校在学中に両親を亡くすという逆風にも耐えて高齢者福祉と言う分野で**「高齢者は自分が！」**と使命感に燃えている逞しいKくんの姿が目には浮かびます。メールでは必要以上に私を持ち上げてくれている書きぶりで赤面を禁じませんが**「K君を絶対修学旅行に連れて行くぞ!!」**と前日家庭訪問して半日談判した私の行動も決して無駄ではなかったと自己満足に浸るとともに**「やっぱり学校がリセットできる場所なんだ!!」**と強く思いました。このメールを貰ったのは昨年7月です。Kくんは今年47才のはずです。菊西中の子ども達も3月に上手に自分をリセットし、今までに無い自分に出会って欲しい、そして自分の道をまい進して欲しいと年度末を迎えて強く思います。
(文責 校長)